特別講演（2）

お玉ヶ池種痘所——その設立拠金者八二名誤謬説の起源をさぐる

深瀬泰旦

お玉ヶ池種痘所の起立にあたって、これに協力した医師は八二名であるという説が在来から流布している。これにたいして昭和五四年（一九七九）にそれが印刷の誤植による誤った説であることを報告したが、これがいつからひろく認められるようになったかについては明らかにすることはできなかった。今回はこの点について報告したい。

お玉ヶ池種痘所——以下種痘所と称する——の歴史についての文献を医史学関係の書物や雑誌について探索したところ、ある時期までは種痘所に関係した個々の医師——たとえば伊東玄朴や大槻俊斎——の伝記の一齣として種痘所について記述することはあっても、種痘所の起立や沿革についてまとまった論考として発表された論文は存在しなかった。

そのような状況のなかで明治二九年（一八九六）ジェンナー牛痘法発明百年の記念すべき年をむかえ、顕彰行事として二つの記念会が開催された。一は上野公園不忍池弁天祠畔の長酡亭で挙行された奨進医会主催の「ジェンナー氏種痘発明百年期紀念会」であり、他は大日本私立衛生会や医事衛生に関係した八団体——十日医会、東京医会、国家医学会、顕微鏡学会、処和会、成医会、赤十字社病院、積善社——が発起団体となって、上野公園博覧会跡五号館において開催された「善那氏種痘発明百年紀念会」である。両記念会とも、ジェンナーをはじめ種痘所の発起に関係した医師たちの肖像画や書状類、さらには種痘書や痘科書などが展示され、そこには種痘所発起の状況をしるす文書がふくまれて

いた。ここにはじめてお玉ヶ池種痘所の起立や沿革についての文書が関係者のまえに展示されたのである。

展示された文書にもとづいて四種の報告書や論文が作成され、活字となって研究者が利用する便宜をえることができるようになった。それらは

①「江戸種痘所」『ジェンナー種痘発明百年期紀年文集』（明治二九年三月四日）

②「種痘所発起」『医談』（第三二号　明治二九年三月三一日）

③「江戸種痘所創立書類」『善那氏種痘発明百年紀念会報告書』（明治三〇年三月二八日）

④「江戸種痘所始末」『中外医事新報』（第三八八号　明治二九年五月二〇日）

として現存している。

これらを比較検討してみると、原文書を一字一字、厳格に引用している場合もある。その一方で原文書の内容を著者なりにパラフレイズして表記している場合もあって、その表現は一見まちまちにみえるが、それは引用の方法が異なることによる表記の相違にすぎないので、原文書は一種類であろうと考えられる。

史料の種類からいうと、原文書は種痘所の起立からはじまり、時系列にしたがって沿革がのべられている「記録」に属するということができる。もちろん公文書としての伺書や下文が挿入されているが、それらは事実の裏付として史料を引用しているということができよう。

では原文書はいかなる性質のものであろうか。明治二九年に富士川游が大槻俊斎小伝を執筆するにあたっては、俊斎の嗣子玄俊からその肖像とともにいろいろな史料を借用して転写したとのべているように、原文書はそのころ大槻玄俊家に保存されていたとかんがえられるので、筆録者は種痘所開設の準備段階からの中心的存在であり、のちに種痘所の頭取に就任した大槻俊斎であろうと推測する。文久二年に俊斎が病いにたおれた後は嗣子の玄俊が頭取見習に就任しているので、以後は玄俊によって書きつがれたと考えられる。明治七年（一八七四）までおよんでいる最後の四行の記述

は、この部分だけが候文ではなく、通常の文語文で表記されているのでいささか異質の感をうけることから、富士川自身が書きくわえたのかも知れない。原文書について筆跡を比較することはできないので、このあたりの関係になるとあくまでも推測の域をでないが、展示に値する文書という条件を考えると、以上のように考えるのがもっとも妥当なところであろう。

四種の報告書の拠金者連名簿を比較すると、①においては八三名の医師の名が正確に記されているが、②、③、④とも八二名の医師の名をみるにすぎない。原稿に誤記があったとは考えられず、おそらく印刷のさいの誤植によって生じた誤謬であろう。

資料の保存という点から考えると、定期刊行物として発刊される雑誌や単行本の保存よりも、厚みに欠けるパンフレット類の保存には神経をつかうわりには結果的にはうまくいかないことがおおい。そのためいきおい①の『紀念文集』よりも、『中外』のような定期刊行物からの引用がおおくなってしまい、せっかく八三名を網羅した連名簿が掲載されている『紀念文集』も引用する機会がすくなくなってしまったといえるのではなかろうか。お玉ヶ池種痘所への関心がたかまりはじめた明治二九年の段階から、八二名説は誤謬とは気づかれずに根強く世間に通用していたといってよいであろう。

これに拍車をかけたのが昭和一九年（一九四四）に『日本医史学雑誌』に発表された山崎佐の論文「お玉ヶ池種痘所」である。この論文で著者は確信にみちた表現で八二名説を主張した。三浦義彰が『文久航海記』（昭和一六年）において主張した八三名説を一刀両断のもとに、ものの見事に否定してしまった。山崎佐はさきの論文の注において、『文久航海記』が三宅艮斎や三宅秀の略伝でありその身辺雑話を編集したもので、真の史学的研究によるものではないから、一般史学的考究の見地からみると重要な箇所に相当おおくの杜撰誤謬が散見する、とあたかも信用するにたる論文ではないことをほのめかしたのち、八二名説が正しいことをあらためて主張した。この論理の展開は見事である。さす

が法廷技術に長けた法曹界の長老だと感服するばかりである。

このように斯界の最高権威者によって明確に断定されてしまうと、それにつづく後学としては反論に価する史料をもちあわせないかぎり、これに従わざるをえないのが実状であろう。さらにこの論文がそれまでの史料を縦横に駆使して、はじめてまとめられた種痘所についての成果なので、これ以後、種痘所について論じようとするものはこれに準拠せざるをえないという状況が醸しだされてしまった。これによって八二名説は決定的に優位な立場をしめるにいたった。

さらに山崎佐に勝るとも劣らない学殖の持ち主である小川鼎三によっても、『医学の歴史』（中公新書　昭和三九年）において八二名説が主張された。東京大学医学部のルーツである種痘所の歴史に造詣の深い小川鼎三は、山崎佐のさきの論文を自家薬籠中のものとして執筆したにちがいないので、八二名説を踏襲するのは当然である。新書という簡単に入手できる書物であり、一般読書人向けに執筆された碩学の著書ということで、本書の影響力たるや計り知れないものがあった。これによって八二名説はさらに確固たる地位を占めるにいたったということができよう。

これにつづく『東京大学医学部百年史』（昭和四二年）の編纂委員長が小川鼎三なので、この書においても八二名説がひきつがれているのは当然といってよいであろう。種痘所を主題にして文章を書こうとするものは、『東京大学医学部百年史』や『医学の歴史』を参考にしてしまうのはごく自然であろう。これによって八二名説はますます社会に浸透していったということができる。

八二名説は明治二九年のジェンナー牛痘法発明百年の記念の年以来、今日まで百年にわたって連綿として語り継がれてきたということができる。これが校正ミスという人為的操作の産物であることをあらためて明らかにすることができた。

（順天堂大学医学部医史学研究室）